

名前の脱ぎ方、着替え方

荻野美穂

日本では「戸籍」という制度があって、そこにはある人の誕生、性別、出生の順番、結婚、離婚、死亡にいたるまで、一生が記録されることになっている。新しく生まれた赤ん坊は名前をつけられて、戸籍に登録される。そのときに決まった名前は、基本的には一生変えられない。そのうえ名前に使ってもよい漢字というのも決められていて、親が子どもにそこに含まれていない字を使った名前をつけると、役所で出生届を受け取ってもらえない。それでいて、戸籍には名前をどう読むか（発音するか）は書かれないので、たとえば「右」と名前をつけて「ひだり」と読んだって「まんなか」と読んだってかまわないという、ヘンテコな制度なのだ。

最近、例外的に名前の変更が認められるケースとして日本で注目されているのは、性同一性障害（G I D）の人たちである。戸籍に登録された性別と性自認（自分が女／男、どちらのカテゴリーに属していると感じるか）とが合わないために苦しむG I Dの人々は、これまでも通称を「女の名前」から「男の名前」（あるいはその逆）に着替えることで、せめてもの矛盾の解決をはかってきた。昨年ようやく、性転換手術など一定の条件を満たしていれば戸籍上の性別変更を認める法律が成立し、2004年7月から施行されて、名前の変更もおこなえるようになった。もっとも、現に結婚している人や、過去の結婚で子どものいる人には性別変更を認めないというふうに、あれこれ厳しい条件がついているので、当事者のあいだでもこの法律の評判はあまりよくない。

でも世の中には、G I Dではないけれど、親が勝手につけた自分の名前がどうもしっくりこないと感じている人も少なくないだろう。昔の日本には、子ども時代の幼名を成人になるときに新しい名前に変えたり、結婚や出世を機会に改名したりという、へビの脱皮のような便利な習慣があったのに、戸籍制度の確立によって失われてしまったのは、とても残念な気がする。

じつは私はこれまでに何度か、名前を着替えてきた。生まれたとき、両親がつけた名前は「美穂子」だった。生まれたのは中国で、第二次大戦で日本が負けたため、生後すぐに日本に引き揚げてきた。帰国してから祖父が私の出生届けを役場に出しにいき、間違って「美穂」と届けてしまった。でも子ども時代の私はこの戸籍上の名前がいやで、自分は本当は「美穂子」なんだと思い、ふだんはずっとそれで通していた。苗字は「滝本」だったが、これも字や発音の硬い感じが好きではなかった。だから結婚して夫の姓の「荻野」に変わったときは嬉しかった。子どもを産んだあと、フェミニズムに出会い、大学院で女性史の勉強を始めた。研究者の卵として論文を書くようになったら、「荻野美穂子」という名前の持つ

とりすました雰囲気、自分の気分とじっくり合わない気がしてきた。いつのまにか、私は「美穂子」から「美穂」に変わっていたのだ。夫ともしっくり行かなくなっていたので離婚したのだが、そのときに婚姻中の姓をそのまま使い続けるという手続きをし、私は晴れて「萩野美穂」としての道を歩き出した。自分の中身と外側とがようやくぴったり合った気がして、離婚と同じくらい、このことも嬉しかった。

ただ、この名前の問題点は、しょっちゅう「はぎの／萩野」さんと間違っ呼ばれたり、書かれたりする事だ。いちいち訂正するのはけっこうエネルギーがいるし、細かいことにこだわってるみたいでいやな気分にもなる。だから世の「はぎの」さんたちに対しては、なんとなく恨めしく思っていたところがある。でもある日突然、メキシコからEメールが来た。私がいつも間違われていた「はぎのみほ」という名前の女性がいて、しかも二人も同時にいて、展覧会をするから何か文章を書いてほしいと言う。向こうもしょっちゅう「おぎのみほ」に間違われてきたのですと言われ、なんとなく責任を感じて引き受けてしまった。

お二人の「はぎのみほ」さんにはまだ会ったこともないのだけれど、作品はインターネット上でいくつか見せてもらった。私が生きているのとは、相当に違った世界。でも、人生のいくつもの曲がり角のひとつか二つを、もしも違う方向に曲がっていたとしたら、こんなふうにいるんな違った自分が、世界のいろんな場所で暮らしていたかもしれないと想像したら、得をしたような気分になった。しばらく前の日本の新聞に、田中宏和さんという男性が同姓同名の人を十数人探し出し、そのうちの二人に会いに行ったという記事が出ていた。田中さんはその気分を、「自分じゃないのに自分のような、自我が広がる微妙な感覚」と表現していて、「そうだ、そうだ」とうなづいてしまった。

思えばここしばらく私は、一枚きりのコートのように「萩野美穂」だけをまとい続けて生きてきた。でももしかしたら、そのうちもう一皮か二皮、自分を脱いでみる日が来るのかもしれない。